

クリの大苗育苗に用いる種子・台木の違いが苗木の生育に及ぼす影響

クリ(筑波)の種子から育成した台木の生育比較を行ったところ、種子の階級では3Lの生育がやや良く、種子の比重が1.05以下は未発芽が多い。台木(筑波実生)の基部径別の苗木(穂木:筑波)の生育比較では、台木基部径が太いほど苗木の生育が良く、副梢も多く確保できる。

農業研究センター球磨農業研究所(担当者:藤丸 治)

研究のねらい

大苗育苗を行うために必要な優良台木を確保するため、種子階級別比重別の台木の生育比較を行う。また、台木の太さ別による苗木の生育比較を行い、大苗育苗に適した種子、台木を選定する。

研究の成果

- 1 ‘筑波’実生台木の太さ別の苗木(穂木:筑波)の生育比較では、台木が太いほど生育が良く、苗も太く、副梢本数も多く、副梢長も長い(表1)。
- 2 種子の階級別の台木基部径比較では、3Lで基部径14mm以上の太い台木の比率が高く、やや生育が良い傾向がある(図1)。
- 3 種子の比重別の台木基部径比較では、1.05でやや太い台木が多いが、比重1.05以下では未発芽がやや多い。(図2)。
- 4 種子の貯蔵中の腐敗果率は、比重が低い1.03で28.8%と高く、その他は10%以下である(図3)。そのため、貯蔵前に比重が低い果実を除くことで腐敗果率を下げることができる。

以上のことから、苗を育成する場合には、台木が太い方がその後の生育が良く、副梢本数の多い苗が得られる。

また、基部径の太い台木を得るためには、階級別では3Lがやや良い傾向がある。比重別では比重が低い種子ではやや未発芽が多く、貯蔵中の腐敗が出やすい。そのため、比重の軽い種子を取り除いて貯蔵した方がよい。

普及上の留意点

- 1 台木育成の際、1年では接ぎ木ができない細い台木(基部径10mm未満)は、更に1年継続育成することにより基部径25mm以上の優良台木として利用できる。
- 2 苗木の堀取りが容易になるので、接ぎ木前に台木を移植することが望ましい。
- 3 播種の際には、発根した種子を播種した方が発芽率が高い。
- 4 いや地を防止するため、台木・苗木育成圃場は2年で移動することが望ましい。

表 1 台木基部径別の苗木の生育

接ぎ木時の 台木基部径 (mm)	苗木の生育			
	基部径 (mm)	高さ (cm)	副梢本数	副梢長 (cm)
10～11	13.7	153.5	1.0	60.9
12～14	15.3	160.4	1.9	71.8
16～18	16.0	172.3	2.2	75.3
25以上	18.9	181.9	3.4	80.6

(注) 副梢：基部径5mm以上 高さ：接ぎ木部からの高さ
 (注) 25mm以上の台木は2年生台木、他は1年生台木

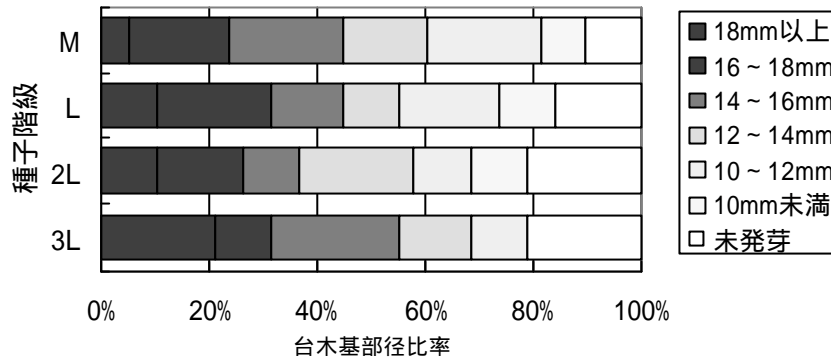


図 1 種子階級別の台木基部径

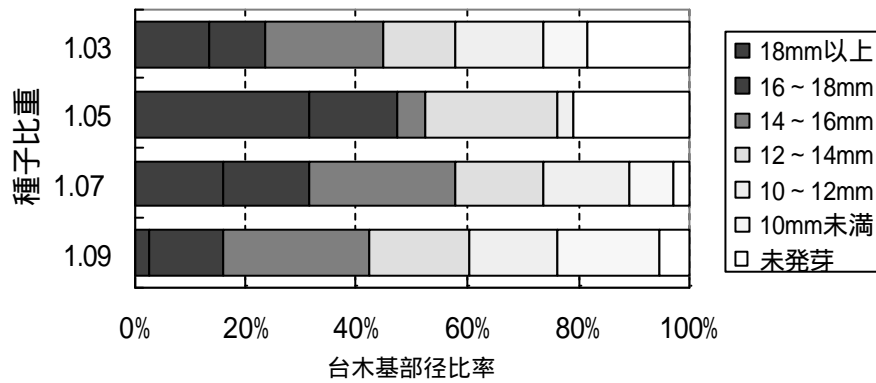


図 2 種子比重別の台木基部径

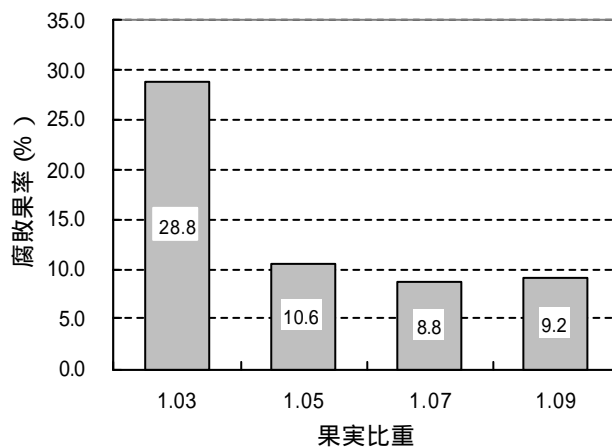


図 3 種子比重別の貯蔵中腐敗果率